

歴史と文化

壱岐の歴史と文化

林 徳衛*

1. はじめに

いにしへの史を繙けば、まず初めに伊奘諾尊といいなりみの尊の陰陽二神の^{ふみ}邁合に依って、大日本豊秋津洲と共に壱岐洲、對馬洲を生み造り給うところを詳しく述べられ、海、山、川の神々よりも早くその成り立ちを説かれている。

この壱岐の島に現在、昭和60年では、八百万人かずたち（住民）4万人程が、海山川の自然の豊かな恵みの中で人生を謳歌しながら生成発展の歩みをつづけている。

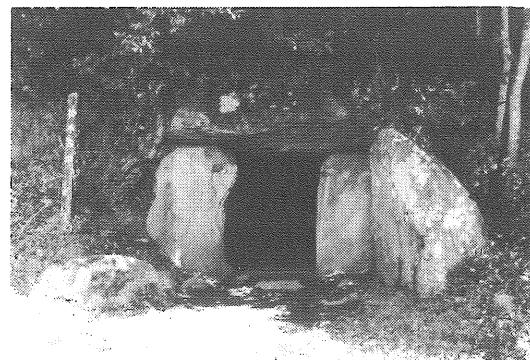
地質学者たちの研究によれば、曾てはアジア大陸と陸続きの頃、その代表的な証明としてのステゴドン象の化石が郷土館に保存されている。また芦辺町八幡半島や石田町久喜附近では魚類や植物、昆虫などの化石も見られて、単純に今日のような環境ばかりではなくて、時には海進期や隆起がくり返されたところで、いわゆる浮き沈みは何度となくあったものといわれている。

そしていよいよ、この島に人間が居着いた頃からの遺跡や遺物が、人類学者、考古学者等によって次々に解き明かされつつある。今日までの研究成果では、「縄文海進」といわれる時代が壱岐では確かにあったとされている。

2. 古代の壱岐文化

先人がこの島に住みはじめてから無土器時代、縄文期、弥生期は正確にあしあとがたどられるほどにその跡は残されている。

大きな先史文化の大転換期であった弥生時代になると、原の辻やその周辺の平地住居跡、カラカミ遺跡地の丘陵地住居跡などの研究で壱岐島の過去からの姿は次々と鮮明になってきて、弥生時代には既に農耕、漁撈、狩猟の生活と共に定住性となり、更に大陸との文化交流を示す鏡や銅貨錢などの遺物も数多く出土研究されていて、先史時代の島の様子は実証史学と考古学などの研究によってほぼ鮮明になってきた。そして「後漢書」「通典」更には、いわゆる三国志の中の魏志倭人伝などによると、大陸と日本との交流のようすが明確にたどれるようになり、これらのことから、壱岐という島のことが浮かんでくるようになる。



掛木古墳

*地質学会会員

対馬——土地山険，多深林，道路如禽鹿徑有千

余戸，無良田興海物

壱岐——方可三百里，多竹木叢林，有三千許家，
差有田地，耕田猶不足食，

これによってみれば、壱岐は平地が多く、農業が発達しているのに対して、対馬は山林が多くて、道路が極めてせまく禽鹿の徑の如しと表現されていて、人口も壱岐は対馬のほぼ3倍あると記されている。

降って3世紀頃になると、「神功皇后三韓征伐」と称される頃になると、日本歴史は国内の紀記万葉をはじめ、沢山の事実とそれに付随した伝説が、壱岐の島の各地にみられる。筒城方面から印通寺港にわたる島の南東部、北部勝本から鯨伏方面の沿岸にかけては、神功皇后にちなんだ伝説が濃密である。この神功皇后の朝鮮征伐と共に、見逃すことのできない人物が武内宿称と「壱岐直真根子」であるが、真根子は今福岡市大字壱岐村に「壱岐神社」として祭られていて、往時の「壱岐」という地名が大和朝廷の主軸として重要な島であったことを物語っているといえよう。

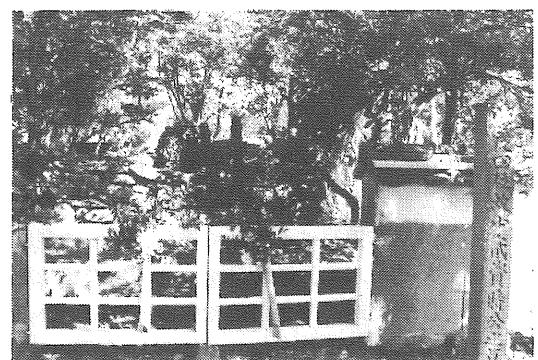
5世紀頃から6、7世紀になると、壱岐の島では古墳時代になって、今大小三百数十基の古墳があるって鬼の岩屋と呼ばれている。この鬼に因んで壱岐を「鬼が島」とも呼ばれ、百合若大臣が何十五隻の大船団をひきいてこの島へ鬼退治にやってきて、何十五万貫の大石を小脇にかかえて、千切っては投げ、千切っては投げ、遂に鬼を退治したという一席の語り草は、まさに明るい、勇壮活潑な物語りである。

3. 国防の最前線『壱岐』

大陸から仏教が伝わり、蘇我、物部の争乱を経て、大化の革新が行われた前後には、大陸の間には必ずしも平穏なことばかりではなかった。都を衛する者を衛士と称し、辺境の島や要害の崎を守る者を防人となえ、主に関東以北の壯士を送って、壱岐や対馬を守らせ筑紫の海辺を警戒させるなど、壱岐には特に2閑と14所の烽を設けるなど、壱岐の島はこの頃からいよいよ国防第一線の辺境地として国家的施設の重要な拠点となり、朝鮮半島や中国大陆から、日本侵攻の際には、常に悲惨な犠牲をくり返すこととなる。寛仁3年(1019)には力伊の賊が大規模に侵入して、壱岐守藤原理

忠の防戦空しく戦死したことを見はじめ、811年、813年、866年、893年、894年、895年と国難はつづき、その度毎に島は荒され、掠奪、惨殺、放火、生捕など、残虐の限りをつくし、筑紫大宰府の狼狽、急場の対応は言語に絶するものがあった。にも拘らず、事件のあと始末は殆どかえりみられず、また現地被害の復興に何程の手を打たれたか、更に今後もくり返し侵攻されるであろう対策に中央がどんな施策、防備をしたかについては、事実に見られる限りでは何等の方途も講ぜられたといふことは見られない。これら壱岐の島にとっての内憂外患は数百年にわたり、更にこの事件後も常にくり返される外敵の侵攻は、朝鮮海峡、対馬海峡、壱岐水道に位置する海上交通の要路に当る壱岐や対馬の運命的存在であるとの一語につきると言ひ放ってよいものかどうか。

国難はつづいた。文永11年(1274)業火のクビライは遂に元軍をして日本侵攻を決し900隻の大船団に3万人の軍兵を送って10月対馬を侵し壱岐を攻めた。壱岐の守護代平景隆は新城で自害全滅、更にクビライは弘安4年(1284)、江南軍、東路軍と二手の大軍団と大船団を編成して壱岐島で合流させることとし、今度は5月を期して日本侵略を決した。その総力は兵14万、船団4千という。この弘安の役には少弐資時以下戦死全滅した。特に胸打たれるることは、この時に戦死した少弐資時は父經資の命をうけて筑紫から壱岐へ渡ったが、時に資時18才、今で言えば高校3年生の若武者であった。僅か百騎ばかりの守兵に将として奮戦したその健気さは、いとも哀愁である。この弘安の役でも、さきの文永の役と同じように、島は荒され、人々は殺され、物量は掠奪され、牛馬に至るまで悉く死の島と化したのである。



少弐資時の墓

4. 倭寇

このような打ち続く島の災厄に対して、京都や鎌倉の中央においては、何等の施策もなく、島民の犠牲や忠節に対しても、さしたる慰めも恩賞の見るべきものもなかった。こうした戦場の連続に中央頼むに足らずと思いこんだ島人たちは、平素からわが庭として馴れて育った海にこそ、その生きる道を求むるほかはなかった。農地の恵みも少なく、阪神地方の経済中心地にも遠ざかった佐賀県や長崎県北部など北部九州沿岸の住民たちは、何かにつけて鎌倉の施策に反逆的で示し合せたように海上に進出していった。生き抜くためには、



中国の壺と銅貨

自分たちの自らの力を頼るほかはなかったのである。かくて朝鮮南部から北朝鮮まで、早船にものをいわせては夜陰に乗じて、沿岸の聚落を襲い、金品を掠めては矢の如く雲消霧散し、出没限なく彼の地を荒しまわって、全く手のつけようもないゲリラ的行動をくり返し、大いに朝鮮半島の心肝を寒からしめたもので、倭寇といって恐れた所以である。この倭寇は2, 3隻の潜行的突然の襲撃が最も多かったが、時には多数の船団を組んで襲うこともあって、いつどこを、どのように荒されるか見当もつかない。果ては中国国内の内乱に乗じて、中国の海賊とも手を組んで山東や東シナ海沿岸にまで暴れ廻る始末であったから、彼の地の沿岸住民の周章狼狽はその極に達し、遂に倭寇取締りを我が国に求め、勘合符を以て正規の貿易を行なうことにしたが、文永の役や弘安の役に、ひどい目に合った島の者たちは、ここぞとばかり仕返しの意気に燃えていたのであった。かくして4世

紀にわたって極東海域を荒しまわった沿海住民たちも、豊臣秀吉の全国統一と厳重な海賊禁止令、更に唐津波多氏の壱岐五氏を奇襲などのために壊滅的な打撃をうけ、更には海賊の親分だった平戸松浦氏が藩政をしいて壱岐もその領地となつたので、以来倭寇の活動は影をひそめてしまった。朝鮮人中権舟の「海東諸国紀」を繙けば、壱岐の当時の一半を窺うことができよう。

こんな事が打ち重なって、さしも東シナ海を荒しまわった海賊たちは遂にその姿を見なくなってしまったが、島 자체の中で、この足跡を尋ねることは殆ど不可能な程で、何等遺跡、遺物は見当らないが、ただ一つ郷土館に保管されている中国の壺と古錢があって、全部中国系のものばかりであるところをみると、海賊の運んで来たものとしか判じようがない。

さて、松浦とは現在佐賀県と長崎県の2県の内、北部沿海にあって、海岸線の出入が複雑な上に、付近海上には点々と島が多くて中世には海賊根拠地とされていたところであって、松浦党といえば海賊の別名、代名詞であることは天下周知のこと、この松浦党の親分は、平戸を根拠としていたので後には、秀吉の天下統一と機を一にして藩政をしき、平戸松浦藩となり、当然海賊の一昧として活躍した壱岐をも、その領分とし、以来明治維新まで300年間は、壱岐は平戸松浦藩政下におかれることとなった。そして明治初めの府県策定によつて、平戸松浦藩下の壱岐も長崎県となり、島内は明治20年の町村制によって12ヶ村となり、昭和3, 40年代における町村合併によって今日の4ヶ町となつて今日に至っている。

有史以来、壱岐の島は日本本土と朝鮮、中国への交通上、国防上からみて海上の要地に当るので、日本から大陸側に出かける国使も壱岐に泊り、大陸から日本へ来る使節も壱岐の島を通過しなければならなかつたのである。

万葉の頃、既に壱岐出身の占部は宮中に出仕していたし、日本書紀、応神天皇9年には壱岐直真根子の正義感は武内宿祢を大いに悲歎せしむるに至つて、後には筑前国早良郡壱岐の松原に壱岐神社に鎮祭されるなど、古き良き時代から、壱岐出身の人物には事欠かない。また続日本紀光仁天皇宝亀2年6月には壱岐島守白雉かみを献上したので、位一級を進め、更に純十疋綿廿屯布州端稻一

千束、さかん 目も位一級を進め賞を守の半を賜い、当嶋の田租三分之一を免除されたことがあり、翌3年12月には、「壱岐郡の人直玉主売は爵二級を賜い並に田租を免じ以て其身を終らしむ」との記録があって、姫神社に祠られている。

3代実錄清和天皇貞觀5年には「壱岐島名田郡人宮主卜部是雄が神祇權少史に、卜部業孝と共に伊伎宿称を姓を賜い、貞觀14年4月の頃には「宮主從五位下兼行丹波權稼伊伎宿称是雄卒す。是雄は壱岐島人なり。本姓卜部、改めて伊伎となす。始祖は忍見足尼命神代により始め、龜卜の事に供す。蕨後子孫祖業を伝習し卜部に備う。是雄卜数之道尤も其の要を究む。日者之中、独歩と謂う可し。云々」と委曲をつくしてこの卜部を賞賛し「寧時年五十四」と町寧に弔詞を贈っている。

5. 万葉集のなかの壱岐

万葉集にある大伴旅人が筑紫の大宰府に居た頃、壱岐に關係あるところを冗長ながら披露しておきたい。天平2年正月13日 神老の宅にあつまりて宴を申く。時に初春の令月にして氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薰す。加え曙の嶺に雲移り松は蘿を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結びては、鳥は穀を封められて林に迷う。庭には新蝶舞い、空には故雁帰る。ここに天を蓋とし地をしきみとく膝を促ケ觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ衿を煙霞の外に開く。淡然と自ら放にし快然と自ら足る。若し翰苑にあらずば何を以ちてか情を嘘べむ。詩に落梅の篇を紀す。古と今とそれ何ぞ異ならむ。宜しく園の梅を賦みて柳かに短詠を成すべし。

(以上は大伴旅人の序)

大宰帥大伴卿の宅の宴の梅の花の歌三十二首の中

○波流奈例婆 字倍母佐枳多流島梅能波奈 岐美乎於母布得 用以母称奈久爾

壱岐守板氏安磨（從六位下概當）

○波流揚即宜可豆良爾手利志 島梅死波奈多礼可有可倍志 佐加豆岐死倍爾

壱岐目 村氏彼方（少柳位上概當）

万葉集卷第十五、天平8年丙子夏6月、使を新羅国に遣はしし時、使人等各別を悲しみて贈り答へたる、また海路の上に旅を勧み思を陳べて作れる歌、また所に当りて誦詠へる古き歌一百四十五

首（その中から壱岐出身の雪連宅麻呂に因んだ数首を掲げて彼を悼む）

壱岐の島に到りて雪連宅満の忽に鬼病に遇いて死去し時作れる歌一首並に短歌
○天皇の遠の朝廷と韓国に渡る吾背は家人の斎い待たぬか正身かも過ちしけむ秋さらば帰りますむとたらねの母に申して時に過ぎ月も経ぬれば今日か来む明日かも来むと家人は待ち恋うらむに遠く国未だも着かず大和をも遠く離りて石が根の荒き島根に宿する君

反歌二首

○石田野に宿する君家人のいづらと吾を問わばいかにいわむ

○世の中は常かくのみと別れぬる君にやもとな吾が恋ひ行かむ

右の三首は挽歌

○天地と共にもがもと思いつつありけむものをはしけやし家を離れて波の上ゆなずさい来てあらたまの月日も来經ぬ雁がねも續ぎて来鳴けばたらちねの母も妻らも朝露に裳の裾ひづち夕霧に衣手ぬれて幸くしもあるらむごとく出でみつつ待つらむものを世の中の人の嘆きは相思はぬ君にあれやも秋萩の散らへる野べの初尾花仮蘆に葺きて雲離れ遠き国べの露霜の寒き山べにやどりせるらむ

反歌二首

○はしけやし妻も児どもも高高に待つらむ君や島隠れぬる

○もみち葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人し悲しも

右の三首は葛井連子老の作れる挽歌

以下割愛

當時雪連宅満は中央に出仕する卜部であったが、今次遣新羅使一行の中に、今で云う天気予報官として加わっていたのであるが、壱岐の島に着くと忽ちに鬼病に遇って急死した。

當時の危険な航海に予報官を失った一同はこの俄かの出来事にいかばかりか驚き悲しんだことだろうと察せられる。反歌の中に詠まれているように「自分たちが京に帰った時に、家族から君はどこに居るのかと問われたら、私は何と答えたらよいだろうか」と、切々の情をこめてこの宅麻呂の死を悼んでいる。そして宅麻呂は当時の街道筋のかたわらにある丘の上に葬られ、今も苔むした露霜の寒い山べに宿りしている。里人は春秋に手厚い

念仏を捧げて宅麻呂の靈を慰め旅中に果てた彼を悼んである。

6. 朝鮮出兵以後

平和の打ち続く時代にせよ、戦乱互いに相軋しむ時代にせよ、この壱岐の島は運命的とも言うべき不安や苦しみの歴史に彩られている。中世から近世にかけての下克上時代にもその例にもれず、壱岐の島は波多民一族の騒乱、松浦党五氏の紊乱、壱岐六人衆の跋扈から日高氏の相克とつづき、遂に平戸松浦が壱岐を領分とするに至ったが、一方豊臣秀吉が天下統一から、諸大名を従えて海賊禁止令を出し、もしその領分から海賊が出た時は、領地没収のこととなったので、壱岐や対馬、松浦などを基地として海上に猛威をふるった倭寇たちも、北部九州や東シナ海から忽然と雲消霧散したのであるが、こんどは秀吉その人が、大海賊団を結成して大陸征伐の野望を抱き、肥前名古屋に広大な司令本部を築き、更に壱岐島には勝本城を急造して、文録・慶長の二役を押し進めたのである。この役に、壱岐の島民は、15才から60才までの者はすべて狩り出されて軍夫となったので、家には老人、子供と女子だけが取り残された。かくて16万の大軍は朝鮮半島で大活躍はしたもの、順次送りこまれる各地から来た兵士たちは、急場の設営不行届きもあって、寺に入っては仏像を壊し、



勝本城跡

神社に乱入しては神輿を燃やして暖をとり、民家を襲っては食糧を奪い、婦女を暴行したり、悪事の限りをつくしたので、島民の苦痛は一通りのものではなかった。

この朝鮮の役に出征した壱岐の従軍兵士の中には、日高甲斐守喜をはじめ、多数にのぼっていて、その戦死者や凱旋者の話は今も伝えられている。

宝永7年西海道巡見使の中に加わっていた俳人曾良は、蒲柳の身に老令の無理がたたって、遂に勝本浦の中藤家で、この年の5月22日に亡くなつたので、賢翁宗臣居士、江戸元住人岩波庄右衛門



芭蕉の高弟・河合曾良の墓

尉と銘して手厚く祭られていて、俳諧同人たちは毎年の命日には菩提寺を会場として句会を催し、ねんごろに俳聖を偲んでいる。

7. 鯨のシオフキ

記紀、万葉の頃から、海の幸として鯨は長い間語り草にもなっている。昭和の初期の頃まで、壱岐沿海には鯨のシオフキが見られぬ日はなかったが、昭和60年には、世界的な悪評をうけて、日本捕鯨は世界の海から撤退の憂き目にあってしまった。壱岐の弥生時代遺跡からも、沢山の鯨に関する遺物が見付かっていて、鯨伏いさかぶという地名にまで残っているほどで、壱岐と鯨や海豚は、むしろ親しい仲間であった。壱岐の沿岸では、一時は17組もの捕鯨社があって、印通寺、初瀬、長者原、八幡、芦辺、大石、妙見、恵比須、浪奈志、瀬戸などの南東海域、湯ノ浦、勝本、渡良などの西北海域といった具合に全島的に鯨捕りが行われていた。15世紀になると、各地から大資本家の専門的な進出があって、その中でも大村から来た深沢、紀州から来た日高明石の播磨屋や平戸から来た数人など、特に目星しい捕鯨家が活躍した。中でも深沢、土肥、原田、篠崎、布屋、許斐などは、1組で千人にも余る多勢を擁して活動し巨額の利益をあげて、藩への運上金も漠大となり、不漁の時には上納ができなかつたので、松浦藩主は三勤交代に江戸から下国する旅費に窮して、一時江戸出発を見合せ、幕府へは病気のため江戸出発の延期を申し出たこと也有つた。冬場に海が荒れて出漁できない期間には、壱岐各地の湾内を干拓して新田を開発した記録も一再ではなかつた。

平戸松浦藩は島と半島、それに海岸つきの小港湾ばかりで、領内は大きな農耕地という程の地域

もなくて、まさに貧乏藩であった。だから海産資源にも課税し、捕獲した鯨にも一頭何程と運上銀を課し、別途の献金を強要したり、ご用金として行事のある毎に金子を求めていたが、一方百姓に對しては厳重な物成り課税をしていたのみならず、農民の根源とされる農地は、肥沃な所は藩有地として、残った瘦せ地も数年毎に割り替えて耕作させ、豊児に拘らず徵税は強行されたのみならず、新地開墾を奨めたので、農家は至る處の山野に点在して殆ど密集々落は形成されず、従って農民の意志統一や、百姓自らの連絡なども不自然な中に散点していった。今日壱岐の島中どこを見ても、散村形態で、僅かの防風林があって、丘も谷も限なく耕地化されているのは、この旧藩政治形態の名残りとも言えるであろう。こうした松浦藩の苛酷な百姓虐めは遂に百姓源三をして悪政暴露の直訴に走らせたのである。通行手形も持たず、寒苦に耐えながら、野宿と乞食の行を続けて遂に將軍の籠に直訴に及んだ。しかし許さるべきもない直訴という重大犯として、壱岐へ送られ、百間馬場で斬首され、あわれ42才の源三は壱岐の百姓たちに多大の示唆を残して逝った。後人たちはこの義人源三のために源三神社として祭り近隣の人々に慕われている。

8. 近世の壱岐

明治維新から、国民思想の統一と富国強兵の国是のもとに、日清、日露と大陸政策を経て、膨脹の一途を推し進めた軍閥は、八々艦隊を編成して更に一層野望を遂げんとしたが、列国の強圧に屈して、この計画は中断され、内の備えを固くしようと、築城本部を設け、壱岐、対馬を要塞地帯として、さきに廃艦となった戦艦土佐の口径42cm主砲を、ひそかに持ちこんで、黒崎砲台を築き、対馬海峡の完全封鎖を計った。かくて着々と国家予算の大部分を投入して第2次世界大戦へ突入したが、結果は有史以来未曾有の大敗となって、米、英、露、支の4国によって日本を分割占領されようとしたが、幸に中国の達見と寛大な恩恵とによって分割占領だけは免れることができた。当時としては、すばらしい電化工事によって、地下の弾倉から弾丸を引き上げて、自動装填できる程の糸をつくした黒崎砲台も、一発の実弾も発射することなく、揚げ句の果ては、自らの爆薬でこれ

を破壊しなければならぬ破目に終ってしまった。今では観光地として憐れな醜態をさらしている。

壱岐の島は遠く神功皇后の大陸渡海からはじまって昭和今日まで、常に朝鮮海峡を推し渡るごとに、敵方からも、自國からも踏み荒らされて、悲歎歴史をくり返してきたし、京や江戸、長崎からも僻遠の不便、不自由な所として、内地罪人の遠島流人たちが島に送りこまれた。遠くは廣根王、伴扶実、近くは大潮平八郎の一派、高野山の僧群や、徳川末期には、全国から一揆の謀反者といった具合に折々の政治犯、経済犯、宗教犯など多岐にわたって島に送られ、各村に割り付け、末端の五人組監視の下におかれた。しかしこれらの人々は、壱岐からみると中央人であり、先進地の文人、武人であるから、社会情勢に疎い島の百姓たちは、寄ると触るとこれらの流人たちから、話をきいたり、文算のことを教わったりもしたようである。中には島人と同化して安穩に了へた人も少なくなかったことが寺院の過去帳からもたどられるほどに、壱岐の文化に貢献した一面も窺うことができる。

陸上は低平で、各地に小平野があり、丘陵地は斜面も限なく農地化され、民家は丘の上にも、丘陵斜面にも点在して、程よい間隔で島中が平和な色彩に充ちている。水資源には不自由がないし、寒暑適切で四面環海、海浜は至るところに港湾があり、磯の渚には魚が豊かである。海浜を歩いても、丘に上っても千差万別の風光が展開して、島人の暮しもまづまづの平和、まさに壱岐は観光の島である。

島中には百軒の民宿と、更に旅館が各地に散在し、福岡の近郊地としてのみならず、上方からも近年は多くの観光客が出入りしているが、主として福岡中継で海路2時間、空路20分の距離で、船便も近時大型となったので風波の憂いもなくなってきた。

歴史を探訪したり、民俗を尋ね、海の幸、山の幸を満喫しながら、特産の焼酎と鮮魚、うなどの料理は賛美歌されている。民情の柔軟なことも島に宿りする人々には珍しい出会いであるが、島の娘たちは福岡や阪神地方に出ているので、本籍人口は7万であるのに、島の現住人口は4万を切っている。島民の半分は出拂っていて、3世代構成の家族はだんだん少くなってきた。